

さい害時に命を救う仕事

地震や水害など大きなさい害が発生したとき、何より大切なことは、人の命を救うことです。

2011（平成23）年の東日本大震災でも、多くの方がけん命に活動しました。

自えい隊

ひさい者の救助や、たおれた建物を取りのぞき道をつくる作業を行いました。また、給水車をはけんしたりかせつぶろをつくったりもしました。

ちゅうとん地のある秋田県を震災当日の夜に出て、早朝に岩手県に入りました。

ひさい地の様子を見て体が固まってしまいました。わたしがこれまでに見たことがない光景が広がっていたからです。「一人でも多くの命を救いたい」という思いがわたしをふるいたたせました。

毎日、どろの中を進む果てしない作業を続けましたが、思うように救助活動は進まず、と中で心が折れそうになりました。しかし、まだどろの中でわたしたちの助けを待っている方のことを思うと「自分のつらさなんてたいしたことない。自分たちが今がんばらないでどうするんだ。自分たちが今必要なんだ」と仲間たちと声をかけ合いながら、必死で救助活動を行いました。



(写真提供 産経新聞社)

第9師団第21普通科連隊（秋田県）

消ぼう

地震の後に発生した火さいの消火活動や津波でひ害を受けた家屋からの救助活動などを行いました。



(写真提供 産経新聞社)

けい察

救急車、消ぼう車をゆう先して通すきん急交通路のかくほやはんざい予ぼうのパトロールを行いました。



(写真提供 兵庫県警)

赤十字など

けが人や病人が次々と運ばれる中、全国から医しが集まって、治りょうに当たりました。



(写真提供 神戸新聞社)

海上ほ安ちょう

多くのしょう害物の中、長時間海にもぐり、津波で流された人たちのそうさくを行いました。



(写真提供 海上保安庁)

読んでみよう



阪神・淡路大震災のときに多くの命を救った地いきの助け合い

「この家は、ばあさんがげん関わきにねているぞ。」
「子ども部屋は台所の上だ。」

淡路島の旧北淡町は、兵庫県南部地震の震源地に近く、多くの建物が全半かいとなるひ害を受けまし



(写真提供 神戸新聞社)

た。しかし、この町では、地いきの人が近所の家のじょうほうを持ちより、がれきの下で消えそうになった命を次々に助け出しました。そして、地震発生から約11時間後、自えい隊がとう着するまでに、生ぞんしていた人、なくなった人、すべての救出を終えていたそうです。

地震の直後、このような助け合いは各地で行われました。阪神・淡路大震災ではかいされた家屋から救出された35000人のうち、27000人は近所の住民に救出されたといわれています。

さい害時の救命救助はスピードが大切です。最初の72時間（3日間）がかぎといわれています。しかし、大地震のときは、各地で同時に生きうめになったり出火したりするので、ひさい地の消ぼうやけい察だけでは救命救助の人数が足りません。全国の消ぼうやけい察のおうえんのとう着は早くても2日目、3日目となります。

このようなじょうきょうで、多くの命を救うのは住民の助け合いです。消ぼうやけい察が十分



阪神・淡路大震災 神戸市消防局の対応

につかんでいない家族のじょうほうも、近所の住民なら知っていることがあります。日ごろから地いきの人とつながりをもっていけば、いっそうの防災・減災につながるでしょう。